

未来の「こそう」 私たちの浄土寺

「ひとみ、いつしよに浄土寺行かへん？」

夏休みのある日、ひとみは久しぶりに東京から里帰りしている姉にさそわれた。

浄土寺というのは、ひとみが住んでいる町にあるお寺だ。このお寺が国宝だということとは聞いていたが、何がすごいのがわからない。低学年のころは、お寺の境内で友達とよく遊んだが、最近では行くこともなくなっていた。

「ええっ、急に何でや？この暑いのに。」

ひとみは面どうくさそうな顔をおなかの大きな姉に向けた。年がはなれた姉はおなかに赤ちゃんがいて、動くのも大変そうだ。

「いいからいいから。ついておいで。」

姉はなかば強引に、浄土寺へ連れて行かれた。ひとみは、「見たいテレビがあったのになあ」と思い、ほほをぶつくとふくらませていた。そして、浄土寺に続く長い階段を上がりながら言った。

「いまさら浄土寺に来て何が楽しいん？何回も来てるやん！」

すると、姉は急に立ち止まった。

ふり返ったひとみの目に入ってきたのは、ひとみをじっと見つめる姉だった。

「どうしたん？お姉ちゃん。」

ひとみは、姉がなんとなく悲しそうな顔をしているように感じた。

悪いことを言ってしまったのかと、少し気になった。

ひとみは、姉が追いつくのを階段の途中で待っていた。

「ごめんな、無理にさそって。次に小野に帰ったら、浄土寺に行こうって、東京にいるときからずっと思ってたんや。」

姉は、ひとみにそう言って、階段を上がりきったところで立ち止まり、大きく息を吸った。

ひとみはだまって、姉を見た。

「おなかの赤ちゃんにも、ふるさとのお堂を見せておきたくてな。」

「そうなのか……」とひとみはわかったような気がした。

「それに、ひとみにも見てもらいたいと思って。」

「えっ、私に？」

「何度も来たことがあるのに、なんで私を連れてきたいの……？」

ひとみは不思議に思った。そんなひとみの様子を察してか、

「いいからいいから。さ、行い。」

と言って、姉は歩き出した。

ひとみにとつても、何か久しぶりのなつかしい風景だった。

二人で並んで浄土堂に向かいながら、姉が話してくれた。

浄土寺は、建て方がとてもめずらしく、奈良の東大寺とここにしかない貴重なものであること、

鎌倉時代に建てられたこと、八百年もの長い間、火事にみまわれることもなく、建物がこわれることもなく、地域の人々の手で守られてきたこと……。

この日、姉が教えてくれた話は、知らないことばかりだった。

奈良の東大寺には、行ったことがある。あんなに有名な建物と同じだなんて、ひとみはまったく知らなかった。ひとみは、浄土寺に来ても境内で遊ぶだけで、浄土堂の中を見たこともなかった。もちろん、案内板を読んだことさえなかった。

「お堂に入ってお参りしようや。」

二人は阿弥陀三尊立像が安置されている夕日の差しこむ浄土堂に入った。

お堂に入ったひとみは、はっと息をのんだ。

この世のものとは思えない、美しく神々しい光景が広がっていた。

江戸から入ってくる西日が、阿弥陀様を背後から赤くかがやかせている。

天じょうもかべも夕日に染められ、ゆかは反射した光で白くなり、まるで阿弥陀様が雲の上につかんでいるようだ。

ひとみは、ただその美しさに心をうばわれていた。

「ああ、私、何も……。」

ひとみは、近くにいながら、今日初めてお堂に入った自分はずかしく思った。

自分が住んでいる町に、こんな貴重な建物と、すばらしい阿弥陀様があることを、今日の今日まで知らなかった。

ふと、となりを見ると、姉は阿弥陀様に見とれながら、大きなおなかを優しくなでていた。

「ひとみ、おなかの赤ちゃんにも、いっぱい伝えたいね。」

「うん。」

ひとみはにっこり笑って、深く何度もうなずいた。

二人が浄土堂から出ると、大きな夕日が金色に空を染めていた。

顔に当たる風もすがすがしい。ひとみは、ふり返って阿弥陀様のいるお堂を見つめた。建物すべてがかがやいて見え、なにか宝物を見つけたような気分だった。

「今度は、三人で見に来ようね。お姉ちゃん！」

姉も、にっこり笑った。

「でも……、その前に、夏休み中に友達をさそってここへ来ようかな。」

そう思いながら、ひとみは浄土堂をもつ一度ふり返った。